

# 津島壽一 大蔵大臣秘話

## 津島さんの野性

私は生れ落ちてからまさか秘書官稼業をやるうなどとは夢にも思つたことがなかつた。大学を出て役人になってからも、大臣とか秘書官とかいう人種とは凡そ縁もゆかりもないものと心得ていた。ところがその私が三回も大蔵大臣秘書官という辞令を受けたのだから世の中は面白い。大體自分は何になるのだ、どういふ仕事に終生打込みたいのだなどと独りぎめしていても、そのようになる場合はおそらく珍しいことである。ひよつとした機縁というか、ちよつとしたはずみであらぬ方向に人生の航路は開かれたり閉されたりするものである。

私の最初の秘書官は小磯内閣における津島壽一蔵相のそれであつた。もともと小磯内閣の最初の蔵相は石渡莊太郎氏であつたが、その石渡氏が内閣書記官長に転じたので時の北支開発総裁の津島氏がその後釜にすわられた。津島さんは元來大蔵省の大先輩であり、かつ私にとつては同郷の大先輩でもある。それに私を大蔵省に拾つてくれたのも他ならぬその津島氏であつた。

津島さんは麹町の下二番町の邸宅に住わっていたが、古い歴史と伝統に恵まれた永田町の旧大蔵大臣官邸を愛されて、よくそこでお仕事もされ寝泊りもされたものである。私は相棒の黒金泰美秘書官（現衆議院議員）と交替で宿直することにしていた。当時空襲が漸く激しくなったが、不思議に私が泊った晩に限って空襲があるので一同にひやかされていた。奥様や女中を連れて官邸内の防空壕に待避したものであるが、大臣は空襲があつても一向に平気で別に普段と変わったことがなかった。私がやかましくいつて、やっと退避してもらつたものである。

その頃、大平洋戦争の前途も漸くあやしくなり、国民は底知れぬ不安に襲われていた。大臣は当時の外相重光氏とよく二人きりで会つて、事態の收拾に打つ手を模索されていたようであつた。ところが当の軍部特に陸軍は一向に弱気を見せず、不退転の戦意を堅持しているかに見えた。あの夜のこと、大蔵大臣は陸軍の中樞たる軍務局や参謀本部の部員の中堅（多くは佐官級）を数人官邸に招いて隔意のない懇談をされた。彼等の気概は当時尚相当なものであつた。

ささやかな宴会が終つて一同は応接間に引揚げてコーヒーをすすりながら、なおも歓談を続けていた。その時何を思つてか大臣が突然靴をぬいで、じゆうたんのの上でしこを踏みかけたのである。一同はいささかあつげにとられた。そして大臣は一同に向つて「若し君達の中でこのわしと相撲をとろうというものがおれば出てこい。私は決して負けはしない」というのである。ところ

が、お相手をしようとする勇者は誰もいなかった。大臣は更に「そんなことでは鶏をひねることは出来てもライオンをたおすことはできないね」と一同に冷笑を浴びせられた。西洋的エチケツトを身につけた津島さんの皮膚を、一皮むけば、こういう野性が潜んでいるのである。

## 一 津島さんのヒューマニティ

第二回目の秘書官は終戦後初の東久邇内閣における同じく津島蔵相のそれであった。麹町のお屋敷も永田町の官邸も戦禍によって烏有に帰したので、大臣は暫く碑文谷の石川さん（現在旅館をされている）のお宅に間借りをされていた。夜は一時二時まで平気で仕事をしていた大臣は、朝七時私が眼をさます時には端然たる姿で机に向われている。机上には十数枚の白い紙片に「次官へ」とか「主計局長へ」とかいう具合に、その日の仕事の指圖書をきれいな墨字で書いてあるのである。私には一体大臣は何時に就寝されて何時に起床されたのか、さっぱり見当がつかかぬた。私はその紙片をもって大蔵省に登庁し、各宛先に配ることを最初の日課にしていた。

ちょうど昭和二十年十月一日のことであった。マツカーサー司令官は、日本政府に覚書を交付して、朝鮮銀行と台湾銀行との閉鎖を命令してきた。この覚書を受取った大蔵省は異常な衝撃を受けて当惑した。早速省議を開いて善後策を協議した。その席上大臣は、当時の金融局長に対し

て、極めて不気嫌にかつ語気荒く次のようにいわれた。「一体君はこの覚書を、はい、かしこまりました、と、いつ受取つてきたのか。君も承知している通り銀行には数多くの預金者がある。その預金者の中には寡婦もおれば孤児もいる。その人達は預金の引出しを禁止されて、明日からの暮しをどうして立てたらよいかというので、今頃は碌々眠れないでいることだろうと思う。もし私が君であれば、その覚書を交付された時、直ちに司令部の係官に対して、この預金の始末を何時までにとつづけるかを念を押してからでないと、これを受取るわけにはまいらぬといって頑張るよ。少しは寄辺のない預金者のことを考えたらどうだね」と。

この言葉には誰からも一言半句の弁解も抗議もなかった。そこで、その夜はその善後策のため省議は徹宵続けられた。夜が深々と更けわたる二時頃であつたらうか、局長一同には疲労の色が歴然と見えかけた。たまりかねた私が傍から大臣に向つて、「大臣、この作業は明朝更に続けることにして、今晚はこの辺で打切られては如何かと思ひます。次官や局長の中には大臣のように健康に恵まれていない方も居られるし、また家庭においても大勢の子供さんを抱えている人も多い（津島さんには子供がいない）のであるから、差出がましいがこの辺で省議を中断して明朝再開ということにしていただきたいと思ひます」と進言した。ところが大臣の顔はみるみる紅潮を

おびてきて、「この国家非常の時に、そのような心懸けでどうするのだ。さつきから見ていると隣の席の者と時計を見合せたりしている不心得者がいる。そんなに細君が恋しいかね。もし腹がすいたというのなら、この津島が握り飯ぐらい食わせてやる。大体君（小生を指す）も、そんなに細君の顔がみたいのかい」と逆襲される始末で手のつけようがない。そこで漸く山際次官（現輸出銀行総裁）と愛知文書課長（前通商産業大臣）の二人が明朝八時までに対策の一切を二人でねつた上、大臣のお屋敷に参上するということでけりがつき、省議は朝三時頃散会となった。

翌朝山際次官と愛知文書課長は約束の八時に、ちゃんと長文の司令部に対する嘆願書（英文）と善後措置要綱を携えられて碑文谷の石川邸の門を叩かれた。それから本件の交渉が軌道に乗ったのである。

賞 鑑 物 人

大体役人というのはおしなべて事勿れ主義者であり、一つの目的を追い求めて飽くことを知らないなどという熱情には乏しいものである。国民の利害休戚ということに鈍感になりがちなものである。役所仕事自体にそういう性質がまわっているものである。その積弊を津島蔵相はこういうやり口で矯められたのである。疲労と睡気で床急ぎをしていた私は、横面を大きくたたかれたような緊張味を感得したことである。

## 三 津島さんのエチケツト

同じく昭和二十年の九月下旬のことであった。津島蔵相は終戦連絡事務局を通して、マッカーサー元帥に会見の申入れをした。ところが間もなく元帥が九月二十三日（秋分）の午前十一時に会うという返事を寄越された。その報せを大臣に通ずると大臣は悦ばれると思いのほか、不思議そうな顔をして「それはおかしい。たしかにおかしい」と独語された。私にはさっぱりその意味がみこめない。「どうしておかしいのですか」と反問した。大臣が、げげんに思われたのはこういう理由からであることが判った。大体西洋では人に会見の申入れをしたり受けたりする場合には、日曜と休祭日避けるのが礼儀である。なるほど日本は敗戦国ではある。しかし一國の大臣を招致するのに、わざわざ祭日をえらぶなどというのは失礼千万である。よろしくこの会見は取止めにしようではないかというのである。そこで私は「一々お説は御尤もであります、マッカーサー司令官は目下日本を管理する連合国の司令官であって、講和条約ができるまでは日本と連合国はまだ戦争状態にあるわけだと思えます。いわば野戦の幕営で会いましょうというのですから、この際はそのエチケツトを守らなくとも、とがめるべき筋合ではないように思われます。

もつと申上げますれば、その忙しい軍務の間にも会いましょうという好意こそ感謝すべきではないでしょうか」というようなことを申上げて、漸く会見されることになった。

当日宮中の祭儀を了えて平服に着替られた大臣は、私を帯同して第一相互ビル七階のマッカーサー司令官の部屋を訪れた。ところが案内に出て来たバンカーという副官が、「よくいらっしやいました。実は元帥は貴方を九月二十二日の午前十一時に引見したいというので当日お待ちしていたのですが、お見えにならないので残念でした。今幕僚会議中ですが、すぐお目にかかっていただきますから、少々待ち下さい」というのである。大臣は私を顧みて、どうも終連の連絡に誤りがあったことに気がついて、当惑されたような表情とそうでなければ嘘だというような救われたような表情とが混在した面持で、にっこり笑われた。かくて四十分の会見を終つて、司令部を出た津島蔵相は極めて明るい表情で馬鹿に機嫌がよかつた。車中、私に「さすが元帥の副官は行届いて丁寧な秘書官だね。立派なものだね」と言われた。これは多少、あてこすりだと思つた私は少々に癪にさわつて、「それに引換え大臣はぐうだらな秘書官を抱えられて、さぞ御迷惑でしょう」と言い返してやった処が、大臣はからからと呵々大笑された。この軽い笑顔をのせて車は真昼の陽光を浴びて都大路を疾走していた。(昭、一九・九)